

山崎延吉日記について

はじめに

明治用水土地改良区に伺った際、理事・竹内清晴氏から「文化センターに山崎延吉コーナーがありますよ」とご教示いただいた【資料①】。山崎延吉とは農政家であり教育者、愛知県立農林学校（現在の安城農林高等学校）の初代校長をつとめた人物である。安城一帯が「日本デンマーク」と呼ばれるほどの農業先進地になったのは、農業改善に努めた山崎の力が大きいという。久野庄太郎は1948年に山崎に愛知用水の構想を語り、励ましと愛知用水実現への協力の約束をとりつけている。

せっかく安城まで来たので明治用水土地改良区の帰りに立ち寄ったところ、既にその展示コーナーはなくなっており、そこにあったすべての資料は安城市歴史博物館に保管されているとのことだった。コーナーと言われたのでちょっとした案内があるだけかと思ったが、安城市歴史博物館に問い合わせたところ、資料はかなりの量があり、その資料は彼の私塾・神風義塾からのものであり、『山崎延吉文庫所蔵資料』として目録が刊行されているとのことだった。そしてそのなかに山崎延吉の日記が含まれていることをご教示いただいた。所蔵資料番号を抜き出し、5月9日、安城市歴史博物館に行くと、山崎延吉の日記そのものは痛みが激しいためコピーを見せていただくことになった。

【資料①】



安城市は「日本のデンマーク」と呼ばれています。

デンマークは、19世紀半ばにプロシアやオーストリアとの戦争に敗れ、国内でもっとも肥沃な土地であったシュレスヴィヒ・ホルスタイン二州を割譲され、国内は「国は小さく、民は豊なく、而して豊りし土地に荒蕪多く」（内村鑑三『デンマルクの話』）という状況に陥りました。にもかかわらずデンマークの人々は「外に失いしものを内において取り返す」（同）という精神のもと、不毛の土地を開拓し、農業復興を遂げていきました。この内村の紹介もあってわが国では、デンマークという国に農業振興国というイメージが重ねられるようになりました。

安城を中心とした碧海台地は、江戸時代までは水利が不便で、未開墾の土地が多い場所でした。そこに「都築弥厚」で有名な明治用水が、その名の通り明治初年に引かれると、農地が次々と開墾されていきました。さらに大正末年から昭和初期にかけて、稲作のほか蔬菜・養鶏なども行う多角経営型農業や、現代の農協に繋がる産業組合が導入され、国内有数の農業先進地帯となりました。この形態もデンマークの農業に似ていました。このように農業振興と先進的農業形態の二重の意味で安城は、「日本のデンマーク」と呼ばれるようになったのです。

安城が「日本のデンマーク」＝日本農業の先進地帯となるにおいては、山崎延吉が果たした役割を見逃すことはできません。山崎は石川泉金沢生まれで、東京帝国大学農科大学（現東京大学農学部）を卒業、福島・大阪で教鞭をとっていましたが、1905（明治38）年に開校されたばかりの安城農林学校（現安城農業高校）の初代校長に、弱冠28歳の若さで就任しました。地元からの支援もあって全国屈指の農業学校に育てあげるとともに、県の農務課長および農事試験所長・農事講習所長などを兼任し、この地域の農業行政・研究・教育の一本化をはかり、安城を中心として農業振興に貢献しました。また『農村自治の研究』など多数の著作を刊行し、農業生産の発展は、農村の改良、すなわち農村の自治を高めることであると主張しました。このようにして、安城は優良農村として全国に知れ渡っていったのです。

その後、三重県の行楽師村（現鈴鹿市）に「我農園」という名の農場を開き、そこに「神風義塾」という農民道場を開設します。この塾教育のために図書館＝文庫の必要性が考えられました。1935（昭和10）年、高松宮殿下より有栖川厚生資金助成を受け、図書館＝有高恩文庫が建設され、それまでに山崎が蒐集した蔵書約12,870冊が取められました。敗戦後神風義塾は閉鎖されたのですが、1955（昭和30）年安城市に山崎を顕彰する「山崎顕徳館」が建てられたのを機に、ここへ蔵書が移管されました。その後この顕徳館も老朽化のため取り壊されることになり、1981（昭和56）年安城文化センター内に「山崎文庫」としてこの蔵書が再移管されました。

蔵書は、明治後期から昭和初期までの農業関係書が圧倒的に多く、この時期の農業や農政を考えるに必要な書籍が揃っています。このほか当時の思想文庫関係の書籍も多くあります。詳しくは、安城市教育委員会から刊行された『山崎文庫図書目録』をご覧ください。

なお、この文化センターには「山崎顕徳館」が所持していた山崎の遺品や関係品を展示する「山崎記念室」もありますので、あわせてご覧いただければと思います。

所 在：〒446-0041 安城市桜町17番11号
安城市文化センター内
電 話：0566-76-1515
利用時間：原則水曜日10:00～16:00
(事前に通称が必要)

交 通：JR東海道線安城駅下車、南西へ徒歩約7分、安城市役所北側

編集・発行 愛知大学図書館 2004年6月25日発行 No. 29

■豊橋図書館 〒441-8522 豊橋市町柳町字町柳1-1 ☎(0532) 47-4181
■名古屋図書館 〒470-0296 西加茂郡三好町黒屋370 ☎(0561) 36-1115
■名古屋東区分館 〒461-8641 名古屋市中区西三丁目10-31 ☎(052) 937-8116
URL: <http://library.aichi-u.ac.jp>

山崎延吉日記

山崎延吉は明治6（1873）年6月26日に生まれ、昭和29（1954）年7月13日に亡くなるまで、断片的に日記を残していた。それが山崎の日記の書き方だったか、本当はすべて揃っていたものが無くなってしま部分的に残っているだけなのかは不明である。日記のはじめは明治31（1898）年、そこから昭和2（1927）年まではおおかた残っている。しかしその後昭和23（1948）年までがなく、昭和24（1949）-昭和28（1953）年の五年日記と昭和29（1954）年の日記が残されていた。亡くなる間近まで日記を残していた。

今回、愛知用水関連の記述を確認するため、昭和24（1949）-昭和29（1954）年までの日記のコピーをすべて撮影させていただいた。この6年分の日記を振り返ることで、昭和23（1948）年からの愛知用水開削のための動きを最後まで応援し続けたという山崎延吉が、どのようなかたちで関わってきたのかを知ることができるのではないだろうか。

そこで、昭和24（1949）-昭和29（1954）年までの日記にひととおり目を通し、愛知用水に関すると思われる部分の翻刻をおこなった。ただし山崎の文字は翻刻が難しく、愛知用水に関する年表をまだ把握できていないため、必要な部分の見落としや誤読があると思われる。再読の必要があるが、この時点でもこれまで明らかにされていなかった事項についてつかめる部分もあり、資料として残すことにした。

山崎延吉文庫所蔵資料（100-11）

- ・日記（289-80）
- ・26：S24-28（五年日記）／27：S29（一年日記）を安城市歴史博物館にて全て撮影し、愛知用水に関する部分については翻刻をおこなった。

（公財）愛知・豊川用水振興協会研究員 達 志保